

「ICCS 新世代国際学術シンポジウム」特集に寄せて

李 春利

(愛知大学 ICCS 運営委員・経済学部教授)

中国の格言には「十年樹木、百年樹人」という言葉がある。「十年先を思うなら、木を育てよ！ 百年先を思うなら、人を育てよ！」という意味である。

それは中国の古典『管子』「権修」篇の一節「一年之計、莫如樹穀；十年之計、莫如樹木；終身之計、莫如樹人。一樹一穫者穀也、一樹十穫者木也、一樹百穫者人也。」に由来するものである。それを和訳すれば、すなわち「一年の計は穀を樹うるに如くは莫く、十年の計は木を樹うるに如くは莫く、終身の計は人を樹うるに如くは莫し。一樹一穫なる者は穀なり、一樹十穫なる者は木なり、一樹百穫なる者は人なり。」という意味である。

2015年12月2日に ICCS 北京同窓会と愛知大学国際中国学研究センター (ICCS) の主催により、「新世代国際学術シンポジウム」が愛知大学名古屋キャンパスで開催された。「新世代」と銘打ったのは、発表者全員が愛知大学と南開大学、中国人民大学が共同で推進してきた博士課程の二重学位プログラムの卒業生であったからだ。愛知大学は2002年に文部科学省の COE (center of excellence) プログラムの認定を受けて、同年10月に ICCS が発足し、その教育事業として2004年4月から博士課程の二重学位 (デュアル・ディグリー) プログラムがスタートした。

それからちょうど12年を迎えるが、このデ

ュアル・ディグリープログラムには日中双方の大学から累計で140名以上の博士課程の学生が在籍し、その中で、40名を超える学生は日中双方の大学から2つの博士号を取得した。学位の申請にあたっては、内容の違った2本の博士論文を日中双方の大学に提出することが義務付けられている。また、このデュアル・ディグリーの卒業生たちを中心に、2011年5月4日には北京で ICCS 同窓会が結成され、さらに、二年後の2013年5月4日には愛知大学北京同窓会が創立された。

2014年6月28日に、北京の中国人民大学で三大学による二重学位プログラム10周年記念シンポジウム「記念愛知大学“国際中国学研究中心”(ICCS)中国分中心成立暨愛知大学・中国人民大学・南開大学双重学籍博士生聯合培養十周年学術成果匯報会：全球化進程中的現代中国学」が盛大に行われた。その際に、卒業生からは母校にホームカミングし、記念報告会を開催したいという提案が出された。その後、公益財団法人・愛知大学教育研究支援財団の支援を受けて、今回の「新世代国際学術シンポジウム」の開催が実現できたのである。

今回、母校にホームカミングしたのは1期生から10期生を跨った9人の同窓生である。1期生から計算すれば、すでに11年の歳月が経ち、卒業生たちも立派な研究者に成長し、

中国の各大学や研究機関で活躍されるようになった。ICCS とデュアル・ディグリープログラムに関わってきた愛知大学の関係者からすれば、まさに「十年樹木、百年樹人」のような感慨をもつようになったのである。シンポジウムのプログラム（付録1）に示されたように、卒業生たちの報告に対し、愛知大学の元指導教授たちを中心に適切なコメントがなされ、大変中身の濃いかみ合った討論が行われた。また、シンポジウムに先立ち、愛知大学 ICCS・北京同窓会の王芳副会長と冷明君事務局局長は、東海ラジオの番組「チャイナなう」の取材を受けて、ゲスト出演した（2015年12月13日放送、<http://www.aichi-u.ac.jp/information/other/Com3000106.html>）。

今回の「新世代国際学術シンポジウム」特

集を組むにあたり、一部の報告者たちにシンポジウムに提出された論文をベースに加筆修正してもらったうえで、新たに投稿論文として投稿してもらい、査読を経て掲載されることになった。その中で、王芳論文と張楠論文はシンポジウム時と同一論文であったが、陳紅絹論文は新しい投稿論文である。

さらに、今回のシンポジウム資料集（「新世代国際学術研究会 返校活動記念冊」）には、愛知大学 ICCS・北京同窓会会長の許光清氏（中国人民大学環境学院副教授）による序言、同副会長の王芳氏（南開大学金融学院副教授）によるあとがきも収録された。シンポジウムの全容とそこまでに至る経緯を理解していただくため、特集の付録としてプログラムとともに収録することにした。本文とあわせてご参考いただければ幸いである。

